

晩年の紫上

—その人物像の宗教性について—

武原弘

「御法」巻前半部は、病勢暮る紫上が死期の近いことを予感し、ひそやかにその時への準備をしながら、やがて「まことに消えゆく露の心地して」（「御法」、四九三頁）命絶えてゆく物語であると読むことができる。日々に迫り来る死と向きあい、これを正視し続けてする彼女の思念と態度に注目し、その宗教的主題性について考察を加えてみたい。

死は、さしあたって、人間の絶対的終末といえる。いまは「あながちにかげとどめまほしき御命とも思されぬ」（同、四七九頁）紫上ではあったが、間近い死を想うとき、彼女の内心は底知れない不安、寂寥に覆われるのであった。あるいは深い絶望、孤独の感に襲われていたのである。物語本文において、「あはれ」「心細し」「悲し」などの心情形容語が重用され、そうした紫上の深い内面の直截な表現となっている。

うち休みて静まりたるほどだにあはれに思さるるを、まして、このころとなりては、何ごとにつけても心細くのみ思し知る。

晩年の紫上 —その人物像の宗教性について—

明石の御方に、三の宮して聞こえたまへる。

惜しからぬこの身ながらもかぎりとして薪尽きなんことの悲し
さ

御返り、心細き筋は後の聞こえも心おくれたるわざにや、（下略）（同、四八二～四八三頁）

右は、出家を許されない紫上が、死後の平安を祈願してであろう、法華經千部の供養を行ったときの描写文である。極楽浄土を思わせるほどの荘嚴な仏事のさ中であって、近い死を見つめる彼女の心中は、なお深い悲哀に沈んで晴れない。文中の「このころとなりては」が、間近い死を予感するこの頃の意であることは、後文において次のように再叙されるところを読んで、明かなのである。

上下心地よげに、興ある気色どもなるを見たまふにも、残り少しなしと身を思したる御心の中には、よろづの事あはれにおぼえたまふ。（同、四八四頁）

今日や見聞きたまふべきとちめなるらむとのみ思さるれば、さしも目とまるまじき人の顔どもも、あはれに見えわたされたたま

ふ。(同)

こうした文脈の裡に深化を辿る紫上の感慨とは、「悲しみをたたえた末期の目にはすべてが深く印象的」と解かれるにふさわしい。さらに続いて叙せられる本文

さすがに情をかはしたまふ方々は、誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我独り行く方知らずなりなむを思いつづくる、いみじうあはれなり。(同、四八四〜四八五頁)

について、とくに「行く方知られず」の表現に着目して鋭い分析と考察を施した鈴木日出男氏は、ここに紫上の「確かな現実把握」と「絶望の把握」を読み取っている。

これらの文脈と前後するように、物語は紫上と明石君、花散里とのそれぞれの唱和場面を描いているが、ひとり胸中に死の影を見つめている紫上の不安と哀切の心情は他者の共有に堪えるものではなく、唱和は逆に彼女の孤愁を際立たせるものとなった。紫上にとつて、それは互いの共感の時というよりは、「遠き別れめきて惜しまる」(同、四八五頁)永訣の時であつたらう。この後、夏になって明石中宮の見舞いを受ける紫上の病状はさらに悪化しており、死は目前に迫り来ていると知る彼女は、「この世のありさまを見はてすなりぬるなどのみ思せば、よろづにつけてものあはれなり」(同、四八六頁)「この宮と姫宮とをぞ、見さしきこえたまはんこと、口惜しくあはれに思されける」(同、四八九頁)と痛切な悲しみにうちくれている。そしていつしか秋、夕暮れの前栽の露を見やりながら、源氏や中宮と交わした唱和

おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露

(同、四九一頁)

が、そのまま彼女の辞世の歌となった。ここで注意されるのは、紫上と源氏との甚しい隔絶である。まさに終末の時を迎えつつ、深い絶望と悲哀の眼ざしで庭前を見おさめては、露の命を嘆く他事をなし得ない紫上に対し、「今日は、いとよく起きゐたまふめるは。この御前にては、こよなく御心もはれればしげなめりかし」(同、四九〇頁)との源氏の慰めの言葉は、いかにも空虚に聞こえたのではないだろうか。野村精一氏の論ずるところ、「彼女の手をとつてその最期を看取つたのは、明石中宮であつて、源氏ではなかつた。

(中略) 所詮紫の死は、孤独そのものであつた」と了解されるのである。絶望の極み、孤独の果て、そこに紫上の死があつたのは確実と認められよう。

しかしながら、紫上の死には、また、看過することのできないま一つの側面がある。あらためてその終焉の日々をさびしく生きながらへていたころの彼女に注目して確認されるように、内面に深まる絶望、不安の思念は理性によつてよく統御され、つねに「心深げに静まりたる」(同、四八七頁)態度を保持する彼女には、いささかも取り乱すところがないのである。

御心の中に思しめぐらすこと多かれど、さかしげに、亡からむ後などのたまひ出づることもなし。ただなべての世の常なきありさまを、おほどかに言少ななるものから、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ(下略) (同、四八七頁)

数年この方、紫上は一人で写経を続けてきており、この年の春には法華經千部供養の法会を主催したことについてはさきにも触れた。

いまでも死の不安、死後への慮りがないわけではないが、そうした修養を重ねつつ「なべての世の常なきありさま」を鑑じ想うている彼女に、生への執着の態度は見られない。後文にも、

限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて、いとかりそめに世を思ひたる気色、似るものなく心苦しく、すずろにもの悲し。(同、四九〇頁)

との描写が施こされておられ、ここで「紫の上にはこの世のものならぬ淨福の雰囲気が漂いはじめている」との読解も当ってしよう。彼女は、いまわの際においても中宮への礼を失うことのない用意を怠らなかつた。

紫上の崇高にして美しい死は、こうした文脈の到達点と考えて不当ではあるまい。

御髪のだうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、つゆばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。灯のいと明かきに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうち紛らはすことありし現の御もてなしよりも、言ふかひなきさまに何心なくて臥したまへる御ありさまの、飽かぬところなし、(下略) (同、四九五～四九六頁)

秋山虔氏の評言のとおり、「最大限に神々しい美しさをもつて描かれた」紫上の死顔は、いま「何心なくて臥したまへる御ありさま」であつて、藤井貞和氏はここに「物語のなかのほとんど唯一の救済」を読みとつている。安藤亨子氏も、紫上の死をトータルに評して、「天命を全うした最も理想的な」「現世において心が澄み透つた後にくる」「もつとも自然な死」と述べた。救済の問題について

晩年の紫上 ― その人物像の宗教性について ―

は後節で考察するとして、このような紫上の美しい死が、そのまま彼女の美しい、理想的な生と等価のものとして物語において形象されたものであることは確実で、さればこそ「御法」巻において、「作者はその最後の生の日々を最大級に美化して語らねばならなかつた」所以なのである。

以上のように読み進ると、「御法」巻に描かれる最晩年の紫上とは、日々に死と対峙して、内面に底知れない不安、絶望の深淵をのぞき見ながらも、透徹した理性と強靱な意志力によって外面に態度を乱さず、静かに歩み、自らの終末へ近づいていったと評することができる。このような彼女の生き方は、かつて女三宮降嫁以来、深刻な苦悩の世界を破綻なく生きぬいてきたその高い人格性の延長として考えることも不当ではないとして、ここではむしろ、死を前にしてする彼女の深い宗教的思念に由来しているものと考えざるべきであろう。紫上は、終末としての死を凝視しつつ、その彼方にあるはずの新しい生に向つて両手をさししのべ、これを切実に希求していたと思われ、「御法」巻巻頭近くでの出家志願のことがその端的な徴証と考えられるからである。次節において、この問題をさらに深く考究してみたい。

二

容態はかばかしくなく、むしろ悪化の一途を辿る病身の紫上は、終りの時に備えるべく、出家を切願する。

後の世のためにと、尊き事どもを多くせさせたまひつつ、いかでなほ本意あるさまになりて、しばしもかかづらはむ命のほど

は行ひを紛れなく、たゆみなく思しのたまへど、さらにゆるしきこえたまはず。(「御法」、四八〇～四八一頁)

が、源氏はこれを許さない。彼には確固たる出家観が抱懷されていた。

わが御心にも、しか思しそめたる筋なれば、かくねむごろに思ひたまへるついでにもよほされて同じ道にも入りなんと思せど、一たび家を出でたまひなば、仮にもこの世をかへりみんとは思しおきてず。(中略)ここながら勤めたまはんほどは、同じ山なりとも、峰を隔ててあひ見たてまつらぬ住み処にかけ離れなんことをのみ思しまうけたるに、かくいと頼もしげなきさまに悩みあついたまへば、いと心苦しき御ありさまを、今はと行き離れんきざみには棄てがたく、なかなか山水の住み処濁りぬべく、思しとどこほるほどに、ただうちあさへたる思ひのまの道心起こす人々には、こやう後れたまひぬべかめり。

(同、四八〇頁)

その要点として、源氏自らにも出家は年来の望みであるが、一たび出家してしまふなら、この世との俗縁はいつさい断たねばならず、紫上とも住み離れて、会うことはできない。かくもきびしい仏門に入るには、病身の紫上を振り捨ててはなおさら実行は難く、修行の心も乱れるにちがいないと、決心がつかないでいる。故に、紫上にも出家は許されない、と説まれる。

ここで源氏の想念する出家観は、あまりに厳格に過ぎて、実行不可能に近く、玉上琢弥氏の評することく、^(註九)「当時の貴族の出家の姿に対する批判を含みながらも、その批判もまた情緒の域にとどまっ

ている」と解されもするし、あるいは西木忠一氏のごとくに、ここに「源氏の自己欺満」を読むことも可能であろう。いずれにしても、紫上に対する源氏の愛執が、彼自身の出家を思いとどまらせ、紫上の出家をも妨げているのである。

ところで、紫上はこれまで既に、再三にわたって出家を願ひ出たことがあった。が、そのつど、源氏の強い反対に会つて、志は叶えられなかつたのである。物語をさかのぼつて五年前、紫上の聡明さとひたすらなる自己抑制によつて、六条院の円満な秩序と平和が保たれたころ、彼女は突如、出家の本意を源氏に訴え表わす。

今は、かうおほさうの住まひならで、のどやかに行ひをも、となむ思ふ。この世はかばかりと、見はてつる心地する齡にもなりにけり。さりぬべきさまに思しゆるしてよ。(「若菜下」、一五九頁)

六条院を「かうおほさうの住まひ」と見、源氏との愛情関係を「この世はかばかり」と悲観して抱く現実認識の深みから、彼女の出家願望は始発した。源氏はこれを制止していう。

みづから深き本意ある事なれど、とまりてさうさうしくおぼえたまひ、ある世に変わらむ御ありさまのうしろめたさによりこそ、ながらふれ。つひにその事遂げなむ後に、ともかくも思しなれ。(同、一五九頁)

述べるところの主旨は、紫上に対する深い愛情の故に、自らの出家をさえ思いとどまっているいま、その願ひ出を受け容れることはできないというもので、これは前に述べておいた「御法」巻での論理と同一のものであり、また、源氏の紫上に対する執心の強さを表わ

すものともなっている。

ついで、源氏に同行して住吉に参詣し、帰邸して一人、紫上が出家を思い続ける場面。

あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、さ
らむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな。(同、一六九頁)
いつかは衰えるであろう源氏の愛情に対する不安、源氏その人への
不信感が、紫上に出家の思いを募らせているのである。

やがて女樂が催され、六条院の榮華が極みゆくさ中に、紫上は再度、出家の許可を願ひ出る。

まめやかに、いと行先少なき心地するを、(中略)さきざき
も聞ゆること、いかで御ゆるしあらば。(同、一九七頁)

対する源氏はこれを許さず、

それはしも、あるまじきことになん。さてかけ離れたまひなむ
世に残りては、何のかひかあらむ。(同頁)

再び同趣の言で説得をくり返す。この年、紫上は三十七才の重厄を
迎えていた(年立てによれば三十九才のはずであるが、この記述は
作者の意図的な作為によるか)。文中の「いと行く先少なき心地」
は、そうした年令の意識による不安を指していったものであるう
が、より厳密には、女三宮降嫁以来「忍びがたく飽かぬことにする
もの思ひ」(同、二〇三頁)が、紫上の内面において極限にまで達
していたことをも意味しているよう。実際、彼女はこの出家志願の表
明の直後に発病した(同頁)。そのまま回復の徴候もなく、病態は
徐々に進行していくなかで、「聞ゆることを、さも心うく」(同、
二〇五頁)と、彼女は重ねて出家の許可を求めるが、源氏の不許可

晩年の紫上 — その人物像の宗教性について —

は変らず、「昔より、みづからぞかかる本意深きを、とまりてさう
さうしく思されん心苦しさにひかれつつ」(同、二〇六頁)とのこ
れまでの考えをくり返すのみである。源氏の愛執が存続する限り、
紫上の出家は遂げられる時を得ない。しかし、不出家のままでの死
を思う不安は源氏、紫上それぞれに大きく(二〇六〜二〇七頁)、
それとの究極の対決を描くのが「御法」巻であるといえるであ
う。

さて、このように物語本文を「若菜」下巻にまでさかのぼって摘
読し、ここで留意すべき要点の一つに、紫上がこれほど切実に出家
を念願するようになる、その動機の問題がある。見てきたように、
端的に、それは女三宮降嫁によって紫上にもたらされた「もの思
ひ」、すなわち苦惱であり、さらにはそれを因由とする発病であろ
う。藤井貞和氏によっても、「女三宮の降嫁が紫上の地位に危機を
もたらしたことは、紫上が出家をおもうにいたった、無視してはな
らない小さくない直接の動機である」^(注1)と説かれている。しかも、そ
うした紫上の不安や苦惱の根源にあるものは、「この世はかばか
り」(前掲)とする認識、すなわち源氏に対する癒しがたい不信、
絶望の思いであった。こうした現実苦から脱出しようとする精神の
営みが無常観へと昇華され、そこに彼女の出家志願があったと解す
ることができるのである。

ところで、「御法」巻における晩年の紫上の出家志願が、上述の
「若菜」下巻でのその単なる延長、あるいは反復ではない点にこ
そ、格別の注意が向けられるべきであろうと私は考える。

出家を許可されなかった紫上は、ここで次のように思念する。

御ゆるしなくて、心ひとつに思し立たむも、さまあしく本意なきやうなれば、この事によりてぞ、女君は恨めしく思ひきこえたまひける。わが御身をも、罪軽かるまじきにやと、うしろめたく思されけり。(「御法」、四八〇—四八一頁)

不許可のまま自分の一存で出家を遂げるとすれば、「さまあしく本意なきやう」であると思念する紫上には、源氏に対する愛執が深く認められよう。確かに、この条の直前の本文にも、「みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、(中略)年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものははれに思されける」(同、四七九頁)とあり、自分の死後の源氏の悲嘆を思う紫上の「あはれ」の心情を描くのと、文脈は一つにつながっている。が、ここでの紫上の「あはれ」を、前述した彼女の深い源氏不信、絶望の思惟との矛盾懂着と読むべきではなからう。^(注12)はや、死を予感し、人間存在の根源的不安と戦っているいまの紫上に思念されるのは、遠山紗江子の説くように、^(注13)「男女の愛憎の世界に生きることが別のこと」であって、その内実は「わが御身をも、罪軽かるまじきにやと、うしろめたく思されけり」(前掲)との一文に集約表現されていると考えられる。すなわち、他ならぬ己れ自身の罪障の深さへの想到である。かつての紫上には、深刻な「もの思ひ」の原因も、出家志願の動機も、すべて他者がもたらす現実苦として外在するものであったが、「御法」巻に至って、彼女はじめて己れの内なる罪障を見つめる人となった。ここでの紫上の出家志願はそうした彼女の新たな自己認識に発したものであり、同時にまた、出家を遂げることができそうにないそのことが、彼女

の内なる自己の罪障意識を深めていくのである。

紫上が己れの罪障深さを認識するというとき、いま見つけられている「罪」とはなにをさしているのか。前後の本文において、その具体的な記述を見ることはできない。過去にさかのぼって見ても、結果、物語は彼女の人物像に理想の女性像を追求してきたのを懐することになるのであれば、「罪」に当ると考えるべき何ほどの過ちをも見出せないのは、むしろ当然のことである。というよりも、紫上の罪障認識はさらに根源的なのであって、出家できないわが身の状態そのものを、「罪軽かるまじき」と思念しているのである。出家によって、罪にある人間が救済への門を開かれるのであるとすれば、源氏一人への愛執のために出家を遂げ得ない紫上の現在の身は深い罪の中に在る。彼女はいま、このように宗教的な次元にわが身を置いて、その思念を深めているのである。叙述中の「わが御身をも」の「も」に注意したい。はやくから出家の志を抱きながら、紫上に対する愛執の故に未だ不出家のままの源氏もまた紫上と同罪の人であることの表現と、それは解されてよい。

ここで、この条における紫上の内省について深い考察を施された丸山キヨ子氏の高論に学びたい。^(注14)氏によると、「切望する出家が拒まれたとき、紫の上はその拒否を、こばむ人のせいにして、いつまでもそこに佇んではいかなかった。むしろ、その背後にある自らの宿世とむき合った。そうして、それを罪障を負うている自己の存在そのものとして対峙した」「紫の上のこういう内省こそ、人間存在そのものに内在する罪の自覚」とされるのである。あるいは、「すべての人は救われるべきである。(中略)この己れはどうなのか。

(中略)そこまで思いを致すことの出来る人(『紫上』引用者注)は、それこそ、宗教的なそれも深い意味で、選ばれた人ではないであらうか」とも説かれる。「御法」巻における紫上造型の根基が、その人格の深い宗教性に求められることの氏の究明は、きわめて示唆に富んでいる。

なお、己れの罪障を自覚するところに信仰の確立を目図する紫上の求道態度は、平安朝仏教史の上で、当時源信によって代表される浄土信仰の立場により近接したものとされ、斎藤暁子氏による(註15)、「浄土信仰が抬頭すべき社会的要因はさまざまであるが、約言すれば現世に対する不信感であろう。そしてそれを個人サイドで解釈すると、究極的には自らの罪が招来したことなのである」と解説される。「往生要集」の思想との関わりから、源氏物語における宗教意識を探究する氏の論考にも、また多くを学びたい。

三

前述したように、間近い死を予感する紫上は、出家しないままでのわが身の終末を思つて「あはれに」「心細く」、さらには「我独り行く方知らずなりなむ」との底知れない孤独と絶望にうち沈みながらも、他方において平静を失わず、いささかも態度を取り乱すことがなかった。華やかにして壮嚴な仏事、ゆかりの人々とのそれとない永遠の別れ、しみじみと交わす唱和など、すべては彼女の死への準備であつたことについても、既に触れておいた。

思うに、死を目前にしてとる紫上のこうした態度それ自身が、本来の意味で宗教と深く相渉るものであると評されうるのではな

晩年の紫上 ― その人物像の宗教性について ―

らうか。彼女は死を見つめている。その向うには、恐怖と孤独の闇ばかり。けれども、「紫上は、恐怖と孤独とからののがれようとはしていない。むしろそれに立ちむかい、眼を見ひらこうとしている」のである。このように傳統的に死と対峙する紫上について、それはいかなる意味において宗教的であるといえるのか。自らの死を見つめる紫上において、死は主体化され、内在化された。今西祐一郎氏の論述に従つて、「死を『死にゆく者』の内側から見るということは、何らかの程度において死とは何かを問ふことだ」ともいえる。『御法』巻での紫上が、その死の意味を明瞭に認識して終末を迎えようとしているとはいえない。むしろ、既述のごとく、見つめているのは内なる闇であり、己れの深い罪障ではあつた。しかし、再び丸山氏の論述を拝借するならば、「紫の上は、救われ難い人間の罪障に思い当たり、何よりもそれを自らのものとしてたじろがずに見据えた故に、それを契機として、救いの入口すら拒まれたはずであつたにも拘らず、救いの第一歩を既に踏み出していたのではな

いか」と考えられるのである。死を見つめること、それは生を見つめることと一つの行為であり、紫上にとつてそれは罪とそれからの救済への道程として、漠然とではあつたが確実に向向されていたと考えられる。紫上のこのような死への対し方は、言葉の嚴密な意味で、確かに宗教的と呼ばれるにふさわしい。

かくて、晩年の紫上―その生と死に、救済を見ることの当否が、最終の考察課題とはなろう。「消えゆく露」(前掲)のようにはかなく美しいその死に、彼女の救済を眺みとる見解がなされていることについては、さきにも触れた。他方、死を目前にしての彼女の深

不安、絶望を重く読む立場にとつては、その救済は見えにくいはずである。

出家を遂げないままで死を迎える紫上には、必然的に救済もありえないと考えるならば、それは宗教的形式論による文学の裁断でしかなく、物語の読みとしては不毛に近かろう。ここで重要なのは、紫上があればど切実に願ひ続ける出家が、その終りの時までついに果されえないこと、すなわち、物語において作者はけつして安易な形で紫上に救済を与えようとしなかった、その主題的意図について考察することである。宗教の入口まで来て、その一步は踏み出したも同然の紫上に、あくまでも総身の入門をさし止めたまま絶命もたらず物語作者の主旨は奈辺にあるのか。前にも述べたように、紫上の出家を未遂に終らせた最大の要因は源氏の愛執であり、より正確には、紫上の源氏に対する愛執であつた。阿部秋生氏の卓説のとおり、ここでの紫上は、まさしく「愛欲と仏法との間とを彷徨してゐた」のであり、そこにはおそらく、作者紫式部の宗教観——出家に対する考え方や精神的態度が投影されていると考えて、不当ではないはずである。

作中人物を通して語られているらしい作者の出家観として、私は次の二つの要点をおさえておきたい。その一は、前節において引用した、きわめて厳格で完全主義的な源氏の出家観である。それはあまりに理想主義的で、実行不能の高きにあつたことについては既に触れたが、源氏のこうした出家観は、周辺の「うちあさへたる思ひのままの道心起こす人々」(前掲)の低さに対する反指定として叙述されており、この物語においてしばしば認められる作者の理想追

求の態度の反映と考えることができよう。その二として、「幻」巻で、最愛の紫上に死なれて悲傷の日々を過ごす源氏が、明石君を訪ね、出家への募る思いを弱々しく語り出す場面があるが、これを慰留して明石君の語るところに注意を向けたい。

さやうにあさへたることは、かへりて軽々しきもどかしきなどもたち出でて、なかなかなることなどはべるを、思したつほど鈍きやうにはべらんや。つひに澄みはてさせたまふ方深うはべらむと、思ひやられはべりてこそ。いにしへの例などを聞きはべるにつけても、心におどろかれ、思ふより違ふふしありて、世を厭ふついでになるとか、それはなほわる事とこそ。「幻」、

五二〇頁

さきの源氏の出家観に匹敵する厳しさではないにしても、出家には時間をかけるべきこと、現世に対するいつさいの執着心がなくなつて、心が「つひに澄みはて」る時に実行されるのが理想的であること、これとは逆に、一時的な悲しみや不満の感情のままにする出家は、「あさへたること」「わるき事」と明石君は確言している。現世に対する人間の執着、人間存在の根底に横たわる深い罪障が、一時の気まぐれな出家によつて滅却、解消されるものではなく、したがつて人間の救済がけつして安直にもたらされるものではないことを、この物語の作者はよく認識していたはずで、さればこそいままで、六条御息所の執拗な怨霊や、朧月夜や女三宮の「あさへたる」出家を描き、あるいは源氏と紫上には出家の遂行を遅延してきたのである。察するに、紫式部には、安易で軽率な出家に対する深い懷疑、痛烈な批判の精神が抱かれており、その本音が明石君の言を通

して表白されたのではないだろうか。

以上の考察によって、紫上における救済の問題について、私は次のような要約を試みることができる。近づく死の前で、己れの罪障深さにはじめて気づいた紫上は、重ねての出家切願を申し出たが許されない。彼女の不安、絶望はいつそう深かったのであるが、それもまたわが身の罪障深さの故かと思ひ至り、ひとり敢然と死に就いていく。出家による安易な救済を肯じない作者が紫上に与える、苛酷なまでの厳しい孤独死である。そこに救済はないといえる。が、作者における人間認識の最も切実な深みでの、あるいはその真摯な求道精神の最も真実な高みでのすぐれた己れの分身たりえた紫上に對し、作者は崇高にして美しい死顔を与え、源氏とともに無限の追慕と哀悼をささげたものと了解することが許されよう。

ともあれ、自己の罪障の認識にはじまる作者の宗教的人間探究の営為は、晩年の紫上において本格的な深化を兆しはじめつつ、その死によって中絶したといえる。第三部において、宇治の大君や浮舟の、いわば求道としての愛と死の物語が描き継がれる所以である。

なお、作者紫式部の宗教思想、その出家観について考察するには、『紫式部日記』中の記述が有力な資料となる。しばしば引用される次の一節には、ここでも特に注目の必要がある。

人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひはべらむ。世のいとはしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、聖にならむに、懈怠すべうもはべらず。ただひたみにちそむきても、雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむはべかなる。それに、やすらひはべるなり。

晩年の紫上 — その人物像の宗教性について —

(中略) それ、罪ふかき人は、またかならずしもかなひはべらじ。さきの世しらるることのみおほうはべれば、よろづにつけてぞ悲しくはべる。(全集本、二四六頁)

本文の細部について解釈困難のところもあるが、全体の趣旨としてはほぼ明瞭である。すなわち、浄土信仰への強烈な希求を抱きながら、なお出家の決断をためらう式部の歎きを述べたものである。この記事文に詳細な考察を施した丸山キヨ子氏は、^(註19)「作者は、出家すれば必ず往生出来る、來迎の雲に乗ることが出来るとは考えていなかった」「自らをみつめて、救われ難い罪障を自覚する故に単純に踏みきれない悩みを懐く姿を、しかもなおその上で、素直に踏み切れないそのことを歎く作者」について考え、それを紫上の内省と重ねあわせて論じているが、ここできわめて示唆深いといいたい。「御法」巻における紫上の宗教的思念は、まさしく作者自身のそれであることが明白なのである。

「御法」巻を中心として、晩年の紫上造型にかかわる宗教性について小考を述べた。先学の諸説に多大の教示を受け、感謝する。

注(1) 『日本古典学全集 源氏物語(4)』の頭注による。

(2) 鈴木日出男「紫上の絶望——『御法』巻の方法——」(『文学・語学』四九、昭43・9)

(3) 野村精一「紫の上哀別——御法・幻——」(『国文学』昭62・11)

(4) 注(1)に同じ。

(5) 秋山虔『源氏物語』(岩波新書、昭43・1、一六五頁)

- (6) 藤井貞和「源氏物語の始原と現在」(三一書房、昭47・4、一七一頁)
- (7) 安藤亨子「紫上の死」(「解釈と鑑賞」昭50・4)
注(5)の書、一六四頁。
- (8) 玉上琢弥「源氏物語評釈 第九卷」(角川書店、昭42・7、二二三頁)
- (10) 西木忠一「源氏物語論考」(大学堂書店、昭59・8、一二四頁)
- (11) 注(6)の書、一六八頁。
- (12) 河内山清彦「紫上の晩年―女性哀史的発想を排す―」(青山学院女子短期大学紀要二五、昭46・11)は、「御法」巻での源氏と紫上の「愛情と信頼」を強調し、そこに紫上の不信、絶望を読みとろうとする立場を強く論難している。極論に過ぎていよう。
- (13) 遠山沙江子「紫上と光源氏の晩年をめぐるの一考察―源氏物語主題考―」(清泉女子大学紀要二五、昭52・12)
- (14) 丸山キヨ子「源氏物語の仏教」(創文社、昭60・2、二二三頁、一九頁)
- (15) 斎藤暁子「源氏物語の宗教意識の根底」(桜楓社、昭62・5、三七六頁)
- (16) 注(6)の書、一六九―一七〇頁。
- (17) 今西祐一郎「哀傷と死―源氏物語試論―」(「国語国文」昭54・8)
- (18) 阿部秋生「紫上の出家」(慶応大学国文学論叢三、昭34・

11)

(19) 注(14)の書、二二三頁、二二九頁。

なお、本文の引用に当っては、小学館刊『日本古典文学全集源氏物語』に拠り、巻名と頁数とを記した。